



シンガポールの中高等教育改革と改訂美術シラバス： 下等及び上等中学校用美術シラバスの事例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2020-09-29 キーワード: 作成者: 佐々木, 宰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006925

シンガポールの中等教育改革と改訂美術シラバス

下等及び上等中学校用美術シラバスの事例

佐々木 幸

北海道教育大学教育学部釧路校美術教育研究室

On Reform of Secondary Education and Revised Art Syllabus in Singapore

: Cases of Art Syllabuses for Lower and Upper Secondary Schools

SASAKI Tsukasa

Department of Art Education, Hokkaido University of Education, Kushiro Campus

概 要

シンガポールでは改訂された下等中学校用美術シラバスが2018年から、上等中学校普通（技術）コース用美術シラバスが2019年から実施されている。これらのシラバスは、生徒の文化的アイデンティティ、批判的認識力、視覚的コミュニケーションのためのリテラシー、創造性などのいわゆる21世紀コンピテンシーの獲得を目指したものであった。ほぼ同時期に、シンガポールの中等教育の抜本的な改革を含む「人生のために学べ」をスローガンとした教育改革が始まった。社会との関りを持ちながら創造的に生きていく力を育成しようとする美術教育シラバスの方向性は、生徒の多様な能力を多様なレベルで育成しながら生きていく上での力を獲得させようとする中等教育改革の志向性と一致していることが確認された。

はじめに

2018年に、シンガポールのオン教育相は、新しい教育改革のスローガンとして「人生のために学べ（Learn for Life）」を発表した。これは、1990年代後半の「考える学校、学ぶ国民（Thinking Schools, Learning Nation）」、今世紀になってからの「少なく教え、多くを学べ（Teach Less, Learn More）」といった教育改革に続くものである。

シンガポールの教育は、ながく能力及び競争主義的な側面で知られていた。しかし、今世紀になってからの教育改革では、学校教育をより柔軟なものに変えながら、生徒の多様な資質・能力の開発と伸長が目指された。今次の「人生のために学べ」に基づく教育改革は、学ぶことの厳しさと楽しさのバランスを求め、成

績のための試験や評価のための負荷の軽減を図ろうとするものであった。

2019年9月には、中等教育の抜本的な改革案が示された。「一つの中等教育，多くの教科群（One Secondary Education, Many Subject Bands）」と題されたこの改革案は、これまでシンガポールの教育の大きな特徴をなしていた複線型の学校教育制度の改編を含む抜本的なものである。特に、中学校（Secondary School）における能力別コース分けの廃止は、きわめて大きな改編である。

このような教育改革の背景は美術教育にも共通するものであり、カリキュラムの編成基準である「美術シラバス」の改訂となって具体化されている。小学校（Primary School）や下等中学校（Lower Secondary School）の美術シラバスは、近年改訂されて2018年から実施されている。さらに、上等中学校（Upper Secondary School）の普通（技術）コースのシラバスが2019年から実施されている。

このうち小学校の美術シラバスについては、佐々木がすでにその特徴を報告している¹⁾。本稿では、下等中学校及び上等中学校の美術シラバスを取り上げ、今後の教育改革における中等教育の改編との対応を確認しながら、中等教育における美術教育に託された教育機能を明らかにすることを目的とする。

考察の対象とする改訂シラバスは、下等中学校用の美術シラバス²⁾、上等中学校・普通（技術）コース用美術シラバス³⁾であるが、内容の比較のために小学校美術シラバス⁴⁾にも言及する。

1. 教育改革のスローガン「人生のために学べ」

(1) 競争主義からの脱却

2018年9月28日に開催された学校ワークプランセミナーのスピーチで、オン教育相は「人生のために学べ」をスローガンとした教育改革の内容を発表した⁵⁾。前世紀末の1997年に示された「考える学校，学ぶ国民」のスローガンによる教育改革では、学習内容を3割削減し、考えたり調べたりする学習を通して、21世紀に向けた教育を目指した。2005年からの「少なく教え，多くを学べ」の教育改革では、さらに学習内容を削減し、生徒の能力や適性に応じた教育の柔軟化を目指していた。今次の「人生のために学べ」は、こうした教育の方向性の延長上に位置づけられる。

オンによれば、「考える学校，学ぶ国民」は国家の目線、「少なく教え，多くを学べ」は教師の目線での改革であり、今次の「人生のために学べ」は生徒の目線の教育改革であるという。教育は向上力（uplifting force）と統合力（integrating force）の2側面の作用であり、前者はより良い生活や社会参加のためのスキルや知識を獲得することに、後者は生活改善や社会の不平等を解消していくことにつながり、両者は技術革新や変化の激しい今日的な状況において、より一層求められているという。

シンガポールの教育は、PISA等の国際的な学力調査結果によって、高水準であることが報じられている。他方、小学校修了試験の成績によって中学校のコースが決まる「ストリーミング」と呼ばれる制度は、生徒や保護者にかなりのストレスを与えている。シンガポールの学校教育は、早期からの試験によって生徒を選別し、能力に応じた教育機会を提供する能力主義、競争主義的な性格によってよく知られている。こうしたストリーミングは1980年代から始まり、若干の修正が加えられたり、競争的な側面が緩和されたりしたが、基本的な骨格は今日まで続いてきた。

かつては、小学校4年次の成績に基づいて5・6年次には能力別の3コースに振り分けられていたが、今世紀になってこの制度は廃止された。しかし、小学校修了試験の成績によって、快速コース、普通（学術）コース、普通（技術）コースに複線化する中学校のストリーミングは継続されている。2005年の教育改革では、小学校修了試験によらずに入学できる新しい中等学校が設立され、学校教育制度の柔軟な在り方が模索されてきた。

こうした背景を踏まえた今回の教育改革において、オンが強調するのは学習における「トレード・オフ」、すなわち「相反する価値」のバランスの重要性であった。例えば、それは学習における「厳しさ」と「楽しさ」という相反する価値として示される。学習には厳格さが求められる一方で、学ぶ主体としての生徒が楽しさや喜びを感じられるものでなければならない、ということである。その他には、学力の違いを学習成果として「明確化」する一方で過度の競争を煽らないように「ゆるやかにすること」、能力に応じた「多様性への対応」の一方で「不用意なレッテル」を避けること、生徒個人のための「スキル」と客観化された学力や学歴を占める「成績証明」などの例が挙げられている。

オンは、「人生という長い旅においては、試験や成績は小さなマイルストーンでしかない」という。多国籍企業を誘致し、高い技術力を誇るシンガポールでは各所の業務の自動化が進行し、経済を支えている。他方、人々にはこうした環境に順応しつつ、創造的に生きることが求められる。「ドリルや試験の準備ではなく、未来のための準備に時間と労力を割く方が生徒のためだ」というオンの主張は、試験による競争主義・能力主義からの脱却を意味している。

そのための「成績評価の負荷の削減」に関しては、小学校と中学校における評価を、2か年あたり25%削減するとされた。具体的には、2019年からの小学1年及び2年における点数による全ての評価の廃止、中学1年の中間試験の廃止、2020年からの小学3年及び5年、中学3年の中間試験の廃止が示された。

(2) 一つの中等教育と多くの科目群

オン教育相は、2019年3月の政府の予算委員会において、「人生のために学べ」による教育改革における中等教育の大胆な改革案について答弁した⁶⁾。「一つの中等教育、多くの科目群 (One Secondary Education, Many Subject Bands)」と題されたこの答弁の核は、1980年代から約40年間にわたって行われてきた中学校のストリーミングを廃止することである。すなわち、小学校修了試験の成績に基づいて快速、普通 (学術)、普通 (技術) の3コースに分かれる複線型の学校教育制度を一つに集約する、という大胆なものであった。しかも、2020年から2024年までのパイロット・スクールでの実施を経て、それ以降の全面的な実施を目指している。

シンガポールの中学校は下等中学校 (Lower Secondary) と上等中学校 (Upper Secondary) からなる4年制 (5~6年の在学も可) を基本としている。中学校のストリーミングを決定する小学校修了試験は、これまで多くの小学生とその保護者の教育上の重大な関心事であった。したがって、ストリーミングの廃止による中学校の単線化は、小学生にとっては最大の負荷からの解放と解釈できよう。

中学校卒業後の後期中等教育機関には、ジュニア・カレッジや、技術教育院 (Institute of Technical Education) などがある。単純な比較はできないが、前者は日本の高等学校普通科に、後者は高等学校工業科といった位置づけとしてイメージできる。中学校の単線化構想に呼応して、ジュニア・カレッジも集約・統合が進められた。さらに、高等教育機関である大学への入学資格には適性評価などの多面的な選抜を加えたり、ポリテクニクへの入学には早期からの支援が図られたりしている。

このように、中等教育の改革は、初等教育、後期中等教育及び高等教育を含めた学校教育全体の改革となっている。その方向性を示すスローガンが「人生のために学べ」であり、中等教育改革の核が「一つの中等教育、多くの科目群」なのである。

さて、「科目群」は、Subject Bandsの訳語として筆者が便宜的に当てたものである。華語で「科目編班」と訳されているSubject-Based Bandingは、従来から行われていた習熟度別の教科・科目編成のことであり、SBBなどの略称で呼ばれてきた。例えば、英語という教科に「標準英語」と「基礎英語」の科目を設定したり、母語という教科に「上級母語」、「標準母語」、「基礎母語」の科目を設定したりしている。従来は限

定的であった対象教科をさらに広げ、多くの教科において習熟度別の複数の科目を設定しようとするカリキュラム構想が「多くの科目群 (Subject Bands)」である。

これによって、生徒の習熟度への対応をストリーム (コース) 単位ではなく、教科単位で実現することができる。よりきめ細かく生徒の達成状況に応じた教育機会を提供すると同時に、配属されたコースによる差別感情や劣等感を払拭することが大きなねらいである。すなわち、科目群は、ストリームを統合して「一つの中等教育」を実現させるために必要なカリキュラム上の条件といえる。

2019年9月には、パイロット・スクールにおける試行について教育省が指針を示した⁷⁾。具体的には、2024年までに中学校で教科を拡大した科目編班 (Full Subject Based Banding) の施行が示され、28校のパイロット・スクールにおいて2020年の入学生からこれに取り組むことになった。1年次の科目編班の対象教科は英語、数学、科学、母語とされ、小学校修了試験の成績から、それぞれの教科における習熟度に応じた科目が選択される。翌2021年までには1年次のクラス再編に取り組み、2年次からの人文系教科 (地理、歴史、英文学) などの習熟度別科目群の設定に取り組むという。なお、美術や音楽、体育、デザインとテクノロジー、人格とシティズンシップ教育などの教科については、3つのコース混在の通常レベルの教科として行い、生徒同士の交流を深め異なる見方を尊重し合う機会とするという。

このように、今次の教育改革の主眼は、試験や評価による競争主義からの脱却であり、そのために競争主義・能力主義の象徴的な存在であった中学校のストリーミング撤廃という大幅な制度改編を伴うものとなった。まさに、現在この改革が開始されたところであり、その進展が注目される。

2. シンガポールの美術シラバス変遷と今次の改訂

(1) 美術シラバスの改訂

シンガポールのシラバスは、統一的・標準的なカリキュラム編成の基準である。教科の目標、内容と指導事項、指導上の留意点などが記載されたナショナル・カリキュラムであるという点で、日本の学習指導要領によく似ている。

他方、日本の学習指導要領が小学校、中学校といった学校種別に全教科一斉に改訂されるのに対して、シンガポールのシラバスは教科別に改訂されたため、教科によって改訂年や実施年が異なっていることが普通である。シラバスはその時の教育改革の方針を踏まえたものとなっているが、教科による改訂・実施の時間差は必然的に生じてくる。これまで、美術シラバスは概ね10年程度の間隔で改訂されてきた。

現行の美術シラバスは、小学校、下等中学校ともに2018年から実施されているものである⁸⁾。上等中学校美術についてのシラバスはこれまでなかったのだが、今次の改訂にあわせて初めて示され2019年から実施されている。ただし、これは全コース用ではなく、普通 (技術) コース用の美術シラバスである。

従前のシラバスは、2009年から実施された小学校・下等中学校「美術」シラバスとして示されており、これは、小学校と下等中学校を一つにまとめた合冊であった。また、このシラバスは、2005年からの「少なく教え、多くを学べ」をスローガンとした教育改革の方針を踏まえている。

さらにその前のシラバスは、小学校「美術と工芸 (Art and Crafts)」シラバス (2002年実施)、下等中学校「視覚芸術 (Visual Art)」シラバス (2001年実施) であった。この改訂には、1997年からの「考える学校、学ぶ国民」をスローガンとした教育改革の方針を踏まえている。

今世紀になってからの小学校及び中学校のシラバス改訂をまとめると、次表のようになる (表1参照)。

表1 今世紀の美術シラバスの改訂状況

小学校	下等中学校	上等中学校普通（技術）コース
美術シラバス（2018年実施）	美術シラバス（2018年実施）	美術シラバス（2019年実施）
美術シラバス（2009年実施）		
美術と工芸シラバス（2002年実施）	視覚芸術シラバス（2001年実施）	

現行の美術シラバスは2018年度から実施されているので、同年9月に発表されたオン教育相による「人生のために学ぶ」のスローガン発表に先行している。したがって、シラバスの記載の中に「人生のために学ぶ」への言及はみられない。

現行の美術シラバスには、従来からの「少なく教え、多くを学ぶ」を継承しながらも、21世紀型の社会に対応したスキル、いわゆる21世紀コンピテンシーの獲得という背景がある。この点については、「人生のために学ぶ」による教育改革と同じ文脈にあると考えてよいだろう。

ただし、中学校におけるストーリーミング統合が実現する2024年以降には、上等中学校の普通（技術）コース用のシラバスは制度的な根拠を失うので、2024年前後に「一つの中等教育」に対応した美術シラバスの改訂がなされると予想される。

(2) 21世紀コンピテンシーと2018年実施美術シラバス

シンガポール教育省が示した21世紀コンピテンシーは、小学校、中学校に共通のものであり、三層の同心円による構造図で説明されている。同心円の核から外周に向かって、中心的価値、社会的・情緒的コンピテンシー、グローバル世界で生き抜くためのコンピテンシーという三層から構成されている（図1参照）。

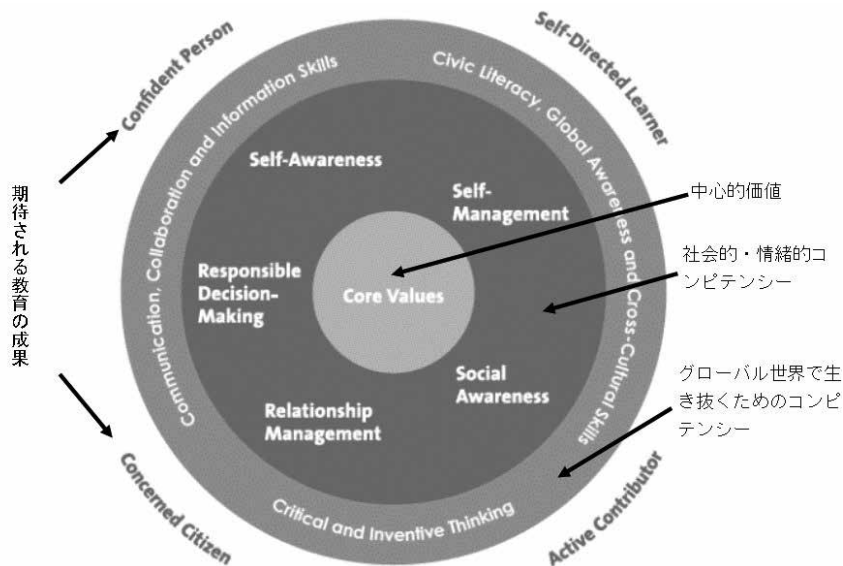


図1 21世紀コンピテンシーと生徒の達成目標⁹⁾

グローバル世界で生き抜くためのコンピテンシーを見ると、「市民リテラシー、グローバル意識と異文化スキル」「批判的・革新的思考」「コミュニケーション、コラボレーションと情報スキル」が示されている。さらに、こうしたコンピテンシーの獲得を通して「期待される教育の成果（Desired Outcomes of Education, DOSと略称される）」が、「自信をもった個人」「自主的な学習者」「積極的な参与者」「思いやりのある市民」として示されている。

ところで、「21世紀型スキル」は、国際的な研究者プロジェクトATC21Sが2009年に示したものであり、創造性とイノベーション、批判的思考・問題解決・意思決定、メタ認知（認知プロセスの知識）、情報リテラシー、ITCリテラシー、コミュニケーション、コラボレーション（チームワーク）、ローカル・グローバルなシティズンシップ、人生とキャリア設計、個人的・社会的責任などの項目が挙げられている¹⁰⁾。

また、OECDのEducation2030プロジェクトでは、社会を作り変え未来を形づくるためのコンピテンシーとして、「新しい価値を創造する」、「対立やジレンマを調整する」、「責任をとる」といった能力が示されている¹¹⁾。どちらも変化の激しい現代社会に対応し、未来を切り開いていくための資質・能力を問題にしており、シンガポールの21世紀コンピテンシーに関する捉え方とほぼ同じであることがわかる。

さて、これらは美術シラバスにどのように反映されているであろうか。美術シラバスの冒頭には、「21世紀における美術教育の哲学と価値」、「学校における美術教育の目標」が示されており、その表記は小学校、中学校で完全に共通している。

「21世紀における美術の哲学と価値」では、美術は、歴史上、極めて重要な人間の表現の様式であり、記憶、思考、価値観、感情に大きく関わりとされる。さらに、自然の色や形から日常的な映像やデザインまで美術は生活に溶け込んでおり、学校のカリキュラムにおけるアカデミックな教科として生徒の全人的な発達のために不可欠である、と主張されている。すなわち、21世紀における美術は、絵を上手に描く技術や、日常から少し離れた品の良い趣味や教養などではなく、人間の生活に深く関与し、思考や感情、価値観に深く関与する表現のモードとして捉えられているのである。

その上で、カリキュラムにおける美術の三つの価値が次のように示されている。

- ①美術は、社会における生徒のアイデンティティ、文化、場所の意識を育成する。
- ②美術は、21世紀において、生徒が批判的に識別したり、視覚的な情報を処理したり、効果的にコミュニケーションをするための力を構築する。
- ③美術は想像力と創造性を拡張する。

「学校における美術教育の目標」では、子どもたちに、「美術を楽しむ」、「視覚的にコミュニケーションをとる」、「社会や文化に関わることを通して意味をつくる」ことをできるようにさせると明示されている。

3. 下等中学校美術シラバスが示す美術教育

(1) 下等中学校における美術教育の位置づけ

下等中等学校のカリキュラムは、コースによって異なるが、例えば普通（学術）コースでは、英語、母語、数学、科学、人文（地理、歴史、英文学）などの日本で言う「5教科」に相当する科目が設定されており、これらは上等中学校でも必修教科とされている。このほかに、デザインと技術、食物と消費者教育、体育、美術、音楽、プロジェクトワークなどの教科が設けられているが、これらは上等中学校では選択教科となる。

そのため、下等中学校での美術は、日本の中学校美術と同じく、すべての生徒が学ぶ美術教育の最終段階である。下等中学校美術シラバスでは、そうした点を踏まえて生徒の視覚的なコミュニケーション、社会における文化的認識、視覚リテラシーなどの獲得が期待されている。

下等中学校美術の授業時間は、週に70分から80分とされ、シラバスでは2年間で48週間に計画されている。時間割上の1コマは、35分から40分であるので、週あたり2コマ分の計算になる。なお、快速コース、普通（学術）コースでは、美術は試験科目である。

美術の教科目標については、前述の通り小学校、中学校に共通した目標として、美術を楽しむ、視覚的なコミュニケーションをとる、社会や文化に関わりながら意味をつくる、という3点が示されている。すなわ

ち、生徒が楽しみながら自分自身を表現したり、コミュニケーションをはかったりし、美術を通じたコミュニティやより広い世界と接点をもちながらそれらを学ぶこと、と解釈されよう。

こうした学校教育における美術教育の目標を踏まえて、シラバスでは中等教育カリキュラムにおける下等中学校美術の位置づけが述べられ、特に視覚的にコミュニケーションをとったり、文化的に社会とかかわったりすることを通して「基本的な視覚リテラシーのスキル」、「文化的な意識」を身につけさせることが強調されている。

(2) 下等中学校美術の内容

下等中学校美術の内容は、色相環の構造を援用した「美術シラバスの枠組み」として、図2のように示されている。

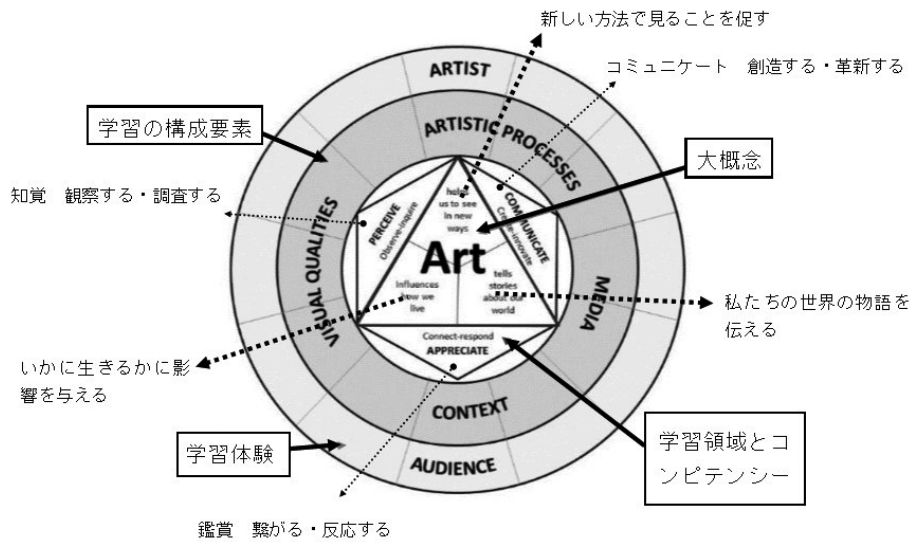


図2 下等中学校美術の内容¹²⁾

この構造図は、小学校シラバスにおいても全く同じものが示されており、初等中等教育に共通した美術の教科内容の構造を表わしている。

中心から外周に向かって、「大概念」、「学習領域とコンピテンシー」、「学習の構成要素」、「学習経験」という構造になっている。

中心に置かれた三角形は、美術の本質を表す「大概念」であり、美術の本質的な機能を三つに分けて示している。それらは、「美術は新しい方法で見ることを促す」、「美術は私たちの世界の物語を伝える」、「美術はいかに生きるかに影響を与える」というものである。

この三角形の各辺に接する形で、3つの「学習領域とそれに対応するコンピテンシー」が置かれている。例えば、学習領域「コミュニケーション」に対しては「創造する・革新する」というコンピテンシーが、学習領域「知覚」に対しては「観察する・調査する」、学習領域「鑑賞」に対しては「繋がる・反応する」といったコンピテンシーが示されている。これらまとめると、次表のようになる（表2参照）。

表2 下等中学校美術シラバスにおける「学習領域とコンピテンシー」と達成目標の対応関係

学習領域	コンピテンシー	達成目標
知 覚	観察する・ 調査する	1 見たことや経験したことを、価値づけたり解釈したりする
		2 多様な方法で観察したことを記録、提示する
		3 視覚から問いや考えを生み出す
コミュニケーション	創造する・ 革新する	4 体験や考えを、美術制作で表現する
		5 新しい視覚的可能性のために、多様な素材や道具、メディアを試す
鑑 賞	繋がる・ 反応する	6 自他の作品の見方を取り入れたり、分かち合ったりする
		7 国内外の美術やその思想や過程の事例を関係づける
		8 他者と美術制作や展示活動をし、視覚的な問題を解決する

さらにその外周には、「学習の構成要素」が示されている。すなわち、作品の意図や背景を導く「文脈」、アイデアを作品化していく方法を扱う「美術的なプロセス」、素材や道具、技法に関する「メディア」、美術の要素やデザインの原理を扱う「視覚的なクオリティ」という4つの要素が、学習の構成要素である。それぞれの構成要素の具体的な内容例をまとめると、次表のようになる（表3参照）。

表3 下等中学校美術シラバスにおける「学習の構成要素」と具体的な内容例

学習の構成要素	具体的な内容例
文 脈	<ul style="list-style-type: none"> ・作品のトピック、主題 ・考えやイメージに至る背景 ・アプローチや方法の理由 ・作品、アイデア、美術の形式や方法が、生徒の生活における経験、視覚、モノなどにもどのように関わっているか
美術的なプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・見たことや経験したことを観察、記録、反映する ・様々なタイプの視覚や情報を集めて、調べる ・多様な素材、道具、方法、イメージ、考えを試し、視覚的な可能性を生む ・考えを伝える美術作品を創造する
メディア	(素描) 鉛筆、木炭、ペン、パステル、顔料、デジタルスクリーン、タブレット (絵画) ポスターカラー、水彩、アクリル、油彩、染料（バティック）、墨（中国画） (写真) スマートフォン、デジタルカメラ、タブレット、画像ソフト (デザイン) マーカー、絵の具、コラージュ素材、デジタルソフト (彫刻) 針金、樹脂粘土、紙粘土、焼成粘土、粘土、厚紙、布、テープ、石膏
視覚的なクオリティ	<ul style="list-style-type: none"> ・美術の要素（線、面、形態、色彩、テクスチャ、空間） ・デザインの原理（調和、均衡、対比、大きさ、動勢、強調）

構造図の最外周には、「学習体験」が、「アーティスト」と「オーディエンス」という2つのタイプとして示されている。つまり、表現者としての体験と、鑑賞者としての体験という意味である。日本の学習指導要領における美術の内容は、表現と鑑賞の2つの領域に分けられているが、「アーティスト」と「オーディエンス」という区分は内容を体験する生徒の立場で表されたものである。教育内容のタイプを、生徒の目線で「学習体験」のタイプに置き換えたものであると理解できる。

さて、下等中学校の美術シラバスの内容構造図を概観すると、内容の中心となる美術の本質を、表現者及び鑑賞者の両方の立場から捉えさせる形になっていることがよくわかる。これらの中に位置するものが、学習の要素であり、学習領域とコンピテンシーである、と解釈できるのである。

4. 上等中学校普通（技術）コース美術シラバス

(1) 初めての上等中学校シラバス

これまでシンガポールの美術シラバスは、小学校及び下等中学校用に限られていた。したがって、2019年実施の上等中学校用美術シラバスは、この学校種における初めての美術シラバスである。ただし、これは普通（技術）コース用のものであり、快速コースや普通（学術）コース用には美術シラバスは用意されていない。

シラバスの記述内容の構成は下等中学用と概ね同様で、冒頭部分には小学校及び下等中学校と共通している「21世紀における美術教育の哲学と価値」、「学校における美術教育の目標」が示されている。

その上で、普通（技術）コースの美術カリキュラムの性格が示されている。若干長くなるが、普通（技術）コースの独自性がよく現れているため、以下に引用する。

「普通（技術）美術カリキュラムは、文脈化された環境における応用的な美術の学習を通して、生徒を惹きつけることを重視する。美術の学習は美術作品、作家やデザイナーといった文脈で解釈されるものであり、そうした中で生徒は、作家やデザイナーの意図や目的を含む環境との関わりと彼らの実践について学ぶのである。自然について考えたり、創造的な産業との関わりを求めたりしながら、生徒はなすことによって学ぶ。学習課程を通して、生徒は後期中等教育やキャリア選択への強みや興味を知ることになる。美術的な興味と能力をもった普通（技術）コースの生徒は、中学校以降の美術教育を続けるために必要な資質、知識、技術を伸ばすことができるだろう。¹³⁾」

これを見ると、ここでの美術教育は、絵画や彫刻といったいわゆる純粋美術、ファインアートよりも、応用美術としてのデザインを強調したものとなっている。表現の意図や目的と環境との関わり、創造的な産業との関わり、キャリア選択などの文言から、そのことを理解できよう。

普通（技術）コースは、実業教育を意識したストーリーミングであるから、そこでの美術教育が産業との関わりをもった応用美術の性格を強く持つことは自明である。下等中学校段階ではコースに関わらず一般的な教育としての美術教育が行われているが、上等中学校段階では、その後の進路との連携から実業的な側面が強調されるのだと考えられる。

さて、上等中学校普通（技術）コースの美術の授業時間は、最低でも週あたり3時間（約6コマ）、2年間で43週を確保するようにシラバスに示されている。時間割上の1コマは35分から40分であるから、これを週に6コマ実施すると、3時間30分から4時間になる。下等中学校での、週あたり70分から80分（2コマ）に比べると、約3倍の授業時間があてられていることになる。こうした時間数も、実業教育を意識したストーリームの性格によるものと考えられる。

(2) 上等中学校普通（技術）コース美術の内容

上等中学校普通（技術）コースの美術の内容は、基本的に下等中学校と同じ枠組みである。したがって、図2（前出）で示された構造図は、上等中学校においても同じように適用される。

ただし、「学習領域とコンピテンシー」に関しては、下等中学校とは異なる達成目標が表3のように設定されている（表3参照）。

表4 上等中学校普通（技術）コース美術シラバスにおける学習領域とコンピテンシー，達成目標の対応関係

学習領域	コンピテンシー	達成目標
知 覚	観察する・ 調査する	1 見たことや経験したことを，価値づけたり解釈したりする
		2 多様な方法で観察したことを記録，提示する
		3 美術における素材や技法，技術を探究する
コミュニケーション	創造する・ 革新する	4 考えを表わすための適切な意味を選択する
		5 他者の作品から学んだ美術の要素やデザインの原理を，自作に適用する
鑑 賞	繋がる・ 反応する	6 美術や美術制作について言語で反応する
		7 美術における強みを認識し，自分自身の学習に責任をもつ
		8 美術関連の教育的・職業的な進路への気づきを示す

「学習の構成要素」については，下等中学校と同じように「文脈」，「美術的なプロセス」，「メディア」，「視覚的なクオリティ」の4要素だが，それぞれの要素の説明は簡略化されており，その要旨をまとめると表5のようになる（表5参照）。

表5 上等中学校普通（技術）コース美術シラバスにおける「学習の構成要素」と具体的な内容例

学習の構成要素	具体的な内容例
文 脈	・素材，技法，美術の要素，デザインの原理についての作家やデザイナーの選択と適用 ・美術作品についての語り
美術的なプロセス	・観察と分析，探究と発展，制作と展示，レビューとリフレクト
メディア	・素描とデジタルメディアは必須，2または3次元メディアから最低一つ （素描）線とエッジ，形と空間，トーンとバリエーション，ポジティブ及びネガティブスペース （デジタルメディア）インターネット，AVレコーディングと編集，画像の操作と創造 （2次元／3次元メディア）多様な素材・技法・工程
視覚的なクオリティ	・美術の要素（線，面，形態，色彩，テクスチャ，空間） ・デザインの原理（均衡，強調，調和，動勢，比率，リズム，統一，多様性）

興味深い点は，「メディア」の内容が，素描（ドローイング）とデジタルメディアを必須とし，さらに2次元または3次元メディアを最低でも一つ選ぶ，という設定になっていることである。絵画などのいわゆるファインアート系の内容は抑制され，応用美術系の内容が強調されている。2次元または3次元メディアについては具体例が示されていないが，素材や技法が強調されていることから，デザインや工芸を意識していることがうかがえる。

シラバスでは，普通（技術）コースの美術学習における内容を，生徒の実態に即して実生活とのつながりに配慮しながら，扱いやすい課題の単位にまとめて指導できるものとしている。加えて，教室や学校を超えた生活空間との関わりのなかで，生徒の好奇心や認識，知識を拡大することが望まれている。

すなわち，上等中学校における美術教育は，美術やデザイン分野へのキャリア教育の一つとしても捉えられていると考えることができるのである。

5. 中学校美術シラバスと中等教育の改革

(1) 中等教育における美術教育の特徴

これまで述べてきたように、シンガポールにおける中学校の美術は、小学校美術と同様の教科目標をもち、小学校とともに初等中等教育を貫く美術教育を形成している。その教科目標は、①美術を楽しむ、②視覚的にコミュニケーションをとる、③社会や文化との関わりから意味をつくる、という三つの到達目標として示されていた。

他方、美術の価値については、①社会における生徒のアイデンティティ保持や文化意識の涵養、②21世紀の批判的能力や視覚的なコミュニケーションのスキル、③想像力と創造性を拡張するもの、と捉えられている。

このような初等中等教育における美術教育と美術の役割を踏まえた上で、中学校段階における美術教育では、基本的な視覚リテラシーのスキル、文化的な意識の涵養に重点が置かれている。特に、下等中学校の美術は、必修として美術を学ぶ最終段階であるため、生徒のその後の学校生活や社会生活とのつながりが意識されている。また、上等中学校においては、普通（技術）コースの性格上、実業教育系への進路の意識が加味されたものになっていた。具体的には、デザイン等の応用美術への志向性を強く打ち出し、デザイナーなどの職業や創造的な産業との関わりが意識されている。すなわち、美術と社会との関わりが、下等中学校では教養教育として一般生活の文脈で想定され、上等中学校の普通（技術）コースでは実業教育として職業や産業の文脈で想定されていることがわかる。

美術で育成する能力は、絵を描いたりものをつくったりする技法や技術の習得のみにあるのではなく、それを通じた視覚的な要素や構成原理の理解によって、一般社会の広範な局面において機能する能力や属性となる。視覚的コミュニケーションの基本的な能力となる視覚リテラシー、イメージする能力である想像力の他に、創造性という人間の属性がそれにあたる。加えて、社会において自分自身のよりどころとなる「アイデンティティ」も、美術教育によって涵養される人間の属性と言えるだろう。

中等教育では、このような美術教育の機能についての実社会とのつながりが、小学校よりもより一層強く意識されている。つまり、美術教育を通して形成される資質・能力が、「生徒の人生においてどのように活かされる」のか、ということに意識が向けられているのである。

(2) まとめ

さて、現在のシンガポールの教育改革のスローガン「人生のために学べ」は、まさに生徒が学ぶことと実社会で生きることとのつながりを、具体的にかつ現実的に求めようとするものである。その中核に据えられた教育改革の目玉が、長く続いた中学校のストリーミングの廃止であった。

1980年代初頭から続けられたストリーミングは、いわば社会構造として定着している感があるので、その統合・廃止は極めて大きな改革であるといえよう。他方、そのような抜本的な改革を断行しようとする背景には、言語と理数を基準とした能力主義からの脱却という意図があると考えられる。

言語と理数の成績によって、生徒の進路をいわゆるエリート層、中間層、技術系労働者層に類型化する発想は、軌道修正を施されながらも基本的には40年余にわたり維持されてきた。狭小な国土で天然資源をもたないシンガポールにとって、人的資源の確保は国家の存亡を左右する重大事であった。試験による振り分けは、人的資源を効率的に開発して再配分できる社会的な装置として作用した。能力の高い者が社会的な優位性を得るという能力主義の発想は、民族や出自によらない共通の原理として、多民族国家であるシンガポール社会に定着したという見方もできる。

試験による早期からのふるい分けは、生徒や保護者に強いストレスを与えてきたことは事実だが、ストリーミングの廃止は当事者ですら驚く大胆な施策として受け止められたと考えられる。逆に言えば、シンガポールの近未来の教育を構想するにあたって、きわめて抜本的な改革を要する状況にあった、ということであろう。21世紀コンピテンシーの開発は、40年以上にわたる学校制度の変更に伴うリスクを超えて必要とされていたことなる。

シンガポール教育省は、従来の言語と理数の成績による能力主義から、より多様で創造的な能力育成へと大きく舵をきった。「生きるために学べ」のスローガンに基づく教育改革と、「一つの中等教育、多くの科目群」という中等教育改革施策は、生徒の多様な能力の在り方を認め、彼らの人生に資する学びを通して、変化の激しい環境に順応して創造的に生きていく資質・能力の形成を図るものである。

中学校美術シラバスでは、美術教育を通して形成しようとする資質・能力と、生徒の生活や実社会との関わりが強く意識されている。美術の本質と、表現者及び鑑賞者としての生徒との間に、教育内容やコンピテンシーが想定されているのである。換言すれば、生徒の人生と美術との関係性において、美術教育の機能が想定されていることになろう。

上記のことから、改訂中学校シラバスの志向性は、今次の教育改革の基本路線と一致していることが確認できる。価値観の多様性を前提とする美術教育は、今後のストリーム統合に伴う多様性の理解のモデルになり得るし、ストリーム統合は美術が活かされるより広範で多様な文脈を生み出すであろう。

他方、前述のようにストリーム統合は抜本的な学校の制度改革であるため、その成否は今後のパイロット・スクールでの試行と修正によるところが大きい。今次のシンガポールの教育改革と美術教育の動向は、アジアにおける最も大胆な試みの一つとして、今後も注目に値する。

注

- 1) 佐々木宰, 「シンガポールの改訂美術シラバスについて: 2018年実施の小学校用美術シラバスの事例」, 『北海道教育大学紀要(教育科学編)』, 第70巻第2号, 2020, pp.297-308.
- 2) Student Development Curriculum Division, *Art Syllabus: Lower Secondary, Implementation starting with 2018 Secondary One Cohort*, Ministry of Education Singapore, 2018.
- 3) Student Development Curriculum Division, *Art Syllabus: Upper Secondary, Normal (Technical) Course, Implementation starting with 2019 Secondary Three Cohort*, Ministry of Education Singapore, 2018.
- 4) Student Development Curriculum Division, *Art Syllabus: Primary One to Six, Implementation starting with 2018 Primary One Cohort*, Ministry of Education Singapore, 2017.
- 5) Ong, Ye Kung, "Opening Address by Mr Ong Ye Kung, Minister for Education, at the Schools Work Plan Seminar", September 28, 2018.
- 6) Ong, Ye Kung, "MOE FY2019 Committee of Supply Debate Response by Minister for Education Ong Ye Kung: Learn for Life-One secondary Education, Many Subject Bands", March 5, 2019.
- 7) Ministry of Education, Singapore, "One Secondary Education, Many Subject Bands: 28 Secondary Schools to Pilot Full Subject-Based Banding", September 3, 2019.
- 8) 小学校美術シラバスは2017年告示, 2018年実施である。下等中学校美術シラバスは2018年告示, 実施である。上等中学校普通(技術)コース美術シラバスは, 2018年告示, 2019年実施である。
- 9) Ministry of Education, Singapore, Secondary School Education, Ministry of Education, Singapore, 2019, p.4に掲載の図を, 筆者が再構成した。
- 10) ATC21ウェブサイト (<http://www.atc21s.org/> 2020年3月25日確認)
- 11) OECD, *The Future of Education and Skills: Education 2030*, OECD, 2018, p.5.
- 12) Student Development Curriculum Division, *Art Syllabus: Lower Secondary, Implementation starting with 2018 Secondary One Cohort*, Ministry of Education Singapore, 2018, p.8に掲載の図を, 筆者が再構成した。

- 13) Student Development Curriculum Division, *Art Syllabus: Upper Secondary, Normal (Technical) Course, Implementation starting with 2019 Secondary Three Cohort*, Ministry of Education Singapore, 2018, p.5. 和訳は筆者による。

参考文献

- ・田村慶子, 『アジアの基礎知識2 シンガポールの基礎知識』, めこん, 2016.
- ・村田翼夫 (編著), 『東南アジアの教育モデル構築 ——南南教育協力への適用』, 学術研究出版2018.
- ・OECD教育研究革新センター (編著), 篠原康正・篠原真子・巖岩晶 (訳), 『アートの教育学 ——革新型社会を拓く学びの技』, 明石書店, 2016.
- ・Lum, Chee-Hoo. (ed.), *Contextualized Practices in Arts Education: An International Dialogue on Singapore*, Singapore: Springer, 2013.

謝 辞

本研究にあたっては、南洋理工大学シンガポール国立教育学院のケック・ビリアン講師、ラム・チーフー准教授、元教育省のジミー・ヌイ・キムチュー氏、ユー・ホックバン氏、チョン・フォンリン氏の多大な協力を得ています。ここにあらためて感謝の意を表します。

本研究はJSPS科研費20K02784の成果の一部を含んでいます。

Acknowledgement

I wish to express my gratitude to Ms. Kehk Bee Lian, Mr. Lum Chee Hoo, Mr. Jimmy Ngui Kim Choo, Mr. Yew Hock Ban and Ms. Chong Fong Lin.

This research was supported by a grant from JSPS KAKENHI Grant Number 20K02784.

(釧路校教授)